

明治中期の前橋製糸業

—「農事調書」と横浜売込記事集計を中心として（上）

井 川 克 彦

一 はじめに

前橋製糸業の研究は、1960年代に石井寛治氏によって大きく進められ、その後『前橋市史』や同氏も参加した1980年代の『群馬県史』の編纂などによって地道な進展を続けている¹⁾。しかし、製糸業史研究の大枠に組み込むべく、その基本的な性格について十分な実証と理論化が行われたとは言い難い。筆者が問題としてあらためて問いたいのは、1876年頃からの諏訪地方を筆頭とする器械製糸業の勃興に対して、前橋製糸業ではその勃興が著しく緩慢だったことをどのように説明するか、である。

『群馬県史』において石井氏は、この原因を主として豪農・士族系製糸家や大商人の経営者的性格に求めているようである。その要旨は以下のようなものである。すなわち、豪農・士族系製糸家は、早い時期に官の保護に頼って器械製糸場を設立したが成果を上げられず、後に続くべき者を器械製糸業から遠ざけた。彼らは器械製糸を放棄し改良座繰を進め、前橋市場で活躍していた大商人も出釜（賃挽）や小粋買を中心とする改良座繰的な経営を進めた。後者の出釜は武州など他県産繭の安価な購入を前提とする商人的経営であり、器械製糸家や西群馬地方の改良座繰結社との繭競争に負けた彼らは1900年代には製糸業から撤退した。

このように前橋製糸業の主たる経営者には豪農・士族・商人が居り、農民から経営者が生まれた諏訪と比べて複雑である。農民層分解論で諏訪器械製糸業勃興を説明した矢木明夫氏の主張を念頭におけば、その理論の延長で町場の製糸業をどのように扱うかという問題がある²⁾。

さらに大きな問題は、器械製糸業においては直接生産者＝工女が存在形態や原料繭の入手方法が分かりやすいが、町場の前橋製糸業においてはそれが把握しにくいことである。既成研究によって横浜への出荷者となった結社・会社の存在はかなり明らかになっているが、結社・会社が直接生産者や原料繭供給地とどのような関係にあったかはほとんど不明である。石井氏が解明した商人系の天原社の出釜経営が唯一の例外であるが、出釜は前橋製糸業の全体ではない。

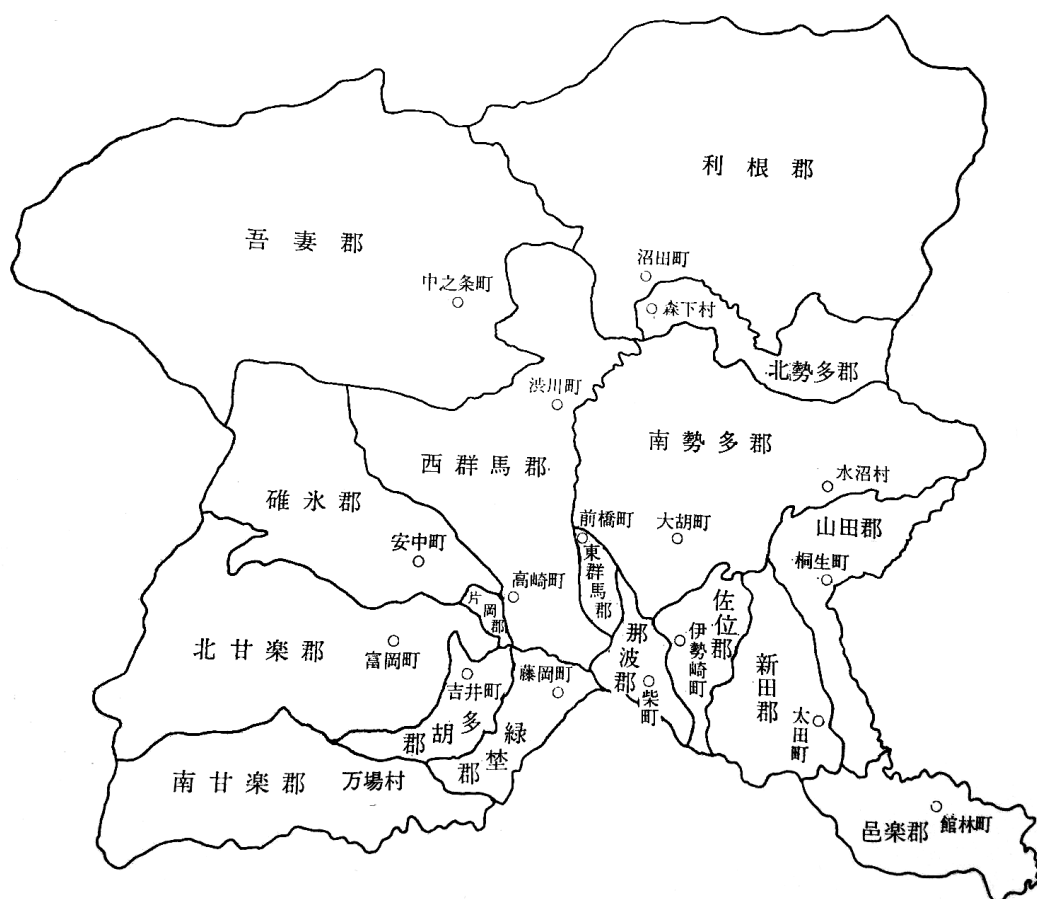
本稿では以上のような問題意識から、屋上屋を架すことを承知の上で、前橋を中心とする製糸業関係の統計値を再検討したい。第一に、『群馬県史』資料編で復刻された『群馬県臨時農事調書』（以下「農事調書」）³⁾を検討の中心にする。この資料は『群馬県蚕糸業現況調査書』（以下「現況調査書」）⁴⁾に比べて従来余り利用されていない。1902～1903年調査の「現況調査書」に対し、

「農事調書」は1888年前後の数値・記述であり、器械製糸業不勃興の要因を探る意味ではより重要である。ただし、「農事調書」の数値は『群馬県統計書』（以下「県統計書」）・『群馬県勸業年報』（以下「勸業年報」）⁵⁾のそれと大きく食い違う所が少ない。その違いを確認することは「農事調書」の価値自体を評価することにもなる。

第二に、『時事新報』記載の1888年分の「横浜生糸売込」記事の群馬県出荷分の売込量を集計・整理し、前橋町などの出荷団体などについて把握し、「農事調書」などの統計値を客観視する一つの基礎とする。群馬県生糸に関する同様の集計作業は石井寛治氏によってたびたび行われているが、本稿では1年分を集計して統計値などとの比較を試みる。

最後に、前橋において改良座繰経営が主流となった経営条件につき考察したい。

あらかじめ行政区画について確認しておく。1878～1896年の郡は大きさが著しく異なり、とりわけ片岡郡と前橋町を含む東群馬郡は小さい（第1図）。前橋町の領域については、次のように



第1図 群馬県略図
明治13～25年

①1878年の郡区町村編制法施行で成立した旧・前橋町は、東群馬郡と南勢多郡にまたがり、東群馬郡は前橋町と22の旧村から成った。②1889年4月の町村制施行で成立した新・前橋町は、旧の東群馬郡の天川村全部と紅雲分村ほか3村（前代田・宗甫分・天川原村）の一部、および南勢多郡の才川村ほか5村（清王寺・岩神・一毛・国領・萩村）の全部が旧・前橋町に合併されたもので、東群馬郡に置かれた。東群馬郡は、前橋町、さきの紅雲分村ほか3村の大部分を含んで成立した上川淵村、および下川淵村の1町2村であった。「農事調査」の東群馬郡・南勢多郡・前橋町の領域は、この町村制施行後のものを採用していると判断できる（稿末補注）。③1892年4月に市制が施行されて前橋町は前橋市となって独立し、東群馬郡は上川淵・下川淵村の2村のみとなった。④1896年4月に東群馬郡・南勢多郡は廃止され、2郡の区域をもって勢多郡が新設された。すなわち旧東群馬郡の2村、および旧南勢多郡の全町村が勢多郡となった⁶⁾。1902年頃の「現況調査書」はこの行政区分に拠っていて、郡領域に変更があるが、前橋市の領域は新・前橋町のままで、「現況調査書」の前橋市と「農事調査」の前橋町の領域は変わっていない。

本稿では便宜上、諸郡を次の5つに分けておく。①北毛＝利根・吾妻・北勢多、②中毛＝東群馬・南勢多、③西毛＝西群馬・片岡・碓氷・北甘楽・南甘楽・緑野・多胡、④佐波＝佐位・那波、⑤東毛＝新田・山田。邑楽。④はふつう中毛とされるが、前橋製糸業の本拠となった②と区別しておく。北毛や南甘楽郡は極めて畑勝ちで、西毛も畑勝である。

二 各郡の蚕糸生産と前橋町

1 繭・生糸生産量と繭流通

前橋製糸業を理解するためには横浜開港前に作られたその原型を念頭においておくことが重要である。すなわち桐生・足利の手織段階の絹織物生産と、そのための原料生糸の生産と、それをつなぐ前橋の生糸市からなる市場構造である。この生糸生産は前橋の町場を中心とするようになったが、それは周辺からの原料繭供給によって支えられた。この原料繭供給は、養蚕をしながら糸挽をせずに繭を売ることを典型とする。そのような原料繭生産地の成立は重要な論点であるが、従来あまり追及されていない。

まず「農事調査」により1888年時点の各郡の繭・生糸生産量を把握しよう。とりあえずある地域の生糸生産はその地域内で生産される繭を優先的に使用すると仮定して、各郡の生糸生産に必要な繭量がどの程度その郡内で生産されていたかを把握する。これが前橋製糸業への原料繭供給の基本をなしたであろう。ただし郡別の生産量については次のような問題がある。たとえば、捻造糸の原糸として他郡に出荷された生糸は、生産量統計において原糸の生産郡の生産量となっているか、あるいは捻造を行い出荷した郡の生産量となっているかという問題がある。以下では、とありあえず前者として生糸生産量を見ていく。

生産量などを掲げた第1表では、まず繭⁷⁾と生糸の生産量の比に注目しよう。ふつう繭1石から生糸1貫が生産されるとしていい。北毛では繭生産量に対し生糸生産量が極めて小さく、3郡計で繭19千石・生糸3千貫、差引16千石の繭過剰である。同様に、中毛の東群馬・南勢多郡の合計で49千石の繭不足。西毛では、西群馬郡が4千石の繭過剰だが、碓氷・北甘楽郡の繭の過不足は小さい。県全体では12千石の繭不足である。

第1表 群馬県郡別蚕糸生産（1888年）

郡（主な町）	繭生産量	生糸生産量	農家戸数	春蚕家数	製糸家数	製糸釜数
	石	貫	戸	戸	戸	釜
利根（沼田）	8,851	783	7,036	5,555	272	388
吾妻（中之条）	8,285	2,035	7,262	4,952	1,800	2,203
北勢多	1,874	215	1,041	725	42	50
小 計	19,010	3,033	15,339	11,232	2,114	2,641
南勢多	13,017	24,729	11,364	7,926	8,613	12,565
東群馬（前橋）	1,781	39,185	3,305	1,029	2,028	5,855
小 計	14,798	63,914	14,669	8,955	10,641	18,420
（前橋町）	(512)	(37,848)	(2,118)	(497)	(1,530)	(4,878)
西群馬（高崎・渋川）	24,911	20,554	17,557	11,478	8,390	13,441
片岡	473	129	667	580	376	400
碓氷（安中）	11,558	11,490	9,922	6,246	5,569	9,154
北甘楽（富岡）	15,051	15,191	10,174	9,810	9,006	13,738
南甘楽	2,983	684	1,813	1,620	754	833
緑野（藤岡）	7,292	3,319	4,688	3,919	1,545	1,998
多胡（吉井）	2,743	1,785	2,205	1,441	1,446	1,899
小 計	65,011	53,152	47,026	35,094	27,086	41,463
佐位（伊勢崎）	8,493	4,475	5,209	3,774	2,518	2,614
那波	4,512	3,618	3,783	2,568	1,488	3,021
小 計	13,005	8,093	8,992	6,342	4,006	5,635
新田（太田）	5,030	2,826	7,009	3,118	678	1,401
山田（桐生）	2,256	1,261	8,133	1,683	729	1,070
邑楽（館林）	1,505	760	9,663	1,740	247	631
小 計	8,791	4,847	24,805	6,541	1,654	3,102
合 計	120,624	133,046	110,831	68,164	45,501	71,261

資料）春蚕家数は「勸業年報」明治21年版、その他は「農事調書」。

注）表示未満四捨五入（以下同じ）。

群馬県産生糸は横浜へ出荷されるばかりでなく、県内の絹織物・絹綿交織物生産の原料となった。織物生産量から原料生糸量を推計したのが第2表である（稿末補注参照）。東毛の山田郡の桐生は言うまでもないが、西毛で生産された低級絹織物の生絹（きぎぬ）も無視できない。江戸期にはその多くが農家による養蚕・製糸・織物の自家一貫生産で生産され、高崎の市や江戸商人の仕入宿を通じて大量に江戸へ販売された⁸⁾。西毛7郡合計の推計織物原料生糸量6千貫は、西毛の生糸生産量の1割に当たる。生糸として商品化されなかったこの生糸量は、第1表の生糸生産量には含まれていないと推測される。1888年ではこの程度だが、横浜開港前の西毛では織物原料生糸量が生糸として商品化された量を大きく上回ったことは確実である⁹⁾。この点は西毛で

第2表 群馬県郡別絹織物生産量・原料生糸量（1888年）

郡 名	絹織物生産量	推計織物原料 生 糸 量	機 業 家 数	
			販 売 用	自 家 用
	反	貫	戸	戸
利 根	45	0	0	3,107
吾 妻	995	0	0	1,331
北 勢 多	0	0	0	138
南 勢 多	0	0	16	4,604
東 群 馬	0	0	0	564
西 群 馬	117,895	3,537	2,388	3,582
片 岡	4,000	240	280	38
碓 氷	7,801	468	501	4,138
北 甘 楽	27,128	1,628	5	4,035
南 甘 楽	349	21	0	336
緑 野	6,984	210	287	2,323
多 胡	3,476	104	526	703
佐 位	121,280	0	1,405	13
那 波	114,170	0	611	6
新 田	13,381	0	2,792	2,618
山 田	300,092	55,871	643	0
邑 楽	0	0	102	3,420
合 計	717,596	62,078	9,556	30,956

資料）「勸業年報」明治21年版、「農事調書」。

注）絹綿交織は山田郡258,615反、新田郡100反で他郡はなし。

表の他に山田郡のみに絹帯地35,317本、絹綿交り帯地248,816本がある。

主な絹織物種類；

利根・吾妻・佐位・那波・新田は太織縞。

西群馬・片岡・碓氷・北甘楽・緑野・多胡は生絹。

南甘楽は生太織・生絹。山田は羽二重・縮緬・紹。

推計織物原料生糸量；

山田；（絹織物＋交織物／2）×0.1〔1反当り生糸100匁〕

西群馬・緑野・多胡；絹織物×0.03〔1反当り生糸30匁〕

片岡・碓氷・北甘楽・南甘楽；絹織物×0.06〔1反当り生糸60匁〕

その他；太織縞・太織で織物原料は玉糸・屑糸とみて0。

改良座繰の発展した前提として重要な論点であるが、本稿では深入りしない。

あらためて原料繭流通の大筋を把握すれば、中毛の東群馬・南勢多郡の繭不足計49千石に対して、繭過剰として北毛三郡の16千石、西毛7郡の（織物原料分も見積もった）6千石、佐位・那波郡の5千石、東毛の新田・山田・邑楽3郡の4千石、以上合計31千石で、差引18千石の繭不足となる。この不足分が県外から移入された計算となる。

繭移出入について、「農事調書」は第3表の数値を記す。残念ながら県内の郡をまたぐ出入は対象外で、県外から各郡への移入と、各郡から県外への移出の数値である。東群馬郡への繭移入量219千石は明らかに過大で、その十分の一の22千石と思われる¹⁰⁾。埼玉県から西群馬郡へ7千石移入され、同郡から長野県・埼玉県へ3千石移出されたことになっている。長野県から碓氷郡への移入も小さくない。東群馬郡の移入を22千石とすれば県合計移入量は31千石、移出4千石を差し引いて純移入27千石という数値である。前述の県内繭・生糸生産量による18千石の繭不足とかなり差があり、とくに「農事調書」の移出入表の信頼性に疑問が残るが、1888年という時点で前橋に大量の県外繭が供給されたことは、石井寛治氏の研究からも確実である。

第3表 群馬県各郡の繭移出入（1888年）

郡 名	県 外 へ	仕 向 地	県 外 から	仕 出 地
利 根	石		石	
吾 妻	0		0	
北 勢 多	901	信州	0	
	0		0	
東 群 馬	欠		219,447	栃木、福島、長野、 神奈川、埼玉
南 勢 多	0		0	
西 群 馬	2,787	長野県、埼玉県	6,820	埼玉県
碓 氷	0		1,160	長野県
北 甘 楽	0		0	
南 甘 楽	102	武州	0	
緑 野	0		0	
多 胡	欠		128	秩父郡
佐 位	0		330	埼玉県
山 田	0		0	
邑 楽	623	栃木県、茨城県、 埼玉県	649	茨城県、埼玉県
合 計	4,413		228,534	

資料)「農事調書」全県編・郡別編。

注)「合計」は井川による集計。「0」は全県編・郡別編の移出入表に数値不記載のもの。

「欠」は全県編の移出入の表に数値が不記載で郡別編が不残存。

片岡郡；郡別編に移出入表なし。全県編の表に不記入。

那波郡；郡別編不残存、全県編の表に不記入。

新田郡；郡別編に「繭、(仕向地)東群馬前橋町・山田郡大間々町、

春蚕495石・夏蚕9石・秋蚕93石(貫以下略)」と記載、全県編では不記載。

邑楽郡；郡別編には上記と数値の異なる移出入表がある。

製糸はほとんど行わず養蚕専業に近いことが顕著なのは、北毛の利根・北勢多郡である。「農事調書」は次のように言う。

〔利根郡〕本郡ノ生糸ハ極メテ小産額ニシテ、真ノ製糸家ト称フルモノ僅ニ十数戸ニ滿タズ、余ハ一戸一釜位ニ止マリ、製糸家ハ各自ノ産額ヲ多ク仲買人ニ売却ス¹¹⁾

〔北勢多郡〕製糸家ハ純粹ノ製糸家ニアラザルヲ以テ、利根郡沼田町及前橋・高崎地方ノ仲買人ニ売渡ノミ、合同販売等ヲ為セシ事ナシ¹²⁾

後に簡単に検討する『上野国郡村誌』（以下「郡村誌」）の各村の記述によれば、1877年頃、利根・北勢多郡の繭はほとんど前橋町か沼田町に出荷されていた。しかし、吾妻郡の繭は前橋町・中之条町（吾妻郡）のほか、高崎町・渋川町・安中町にも、つまり南に接する西群馬・碓氷郡にもかなり出荷されているようである¹³⁾。このほか、同様に山の多い南甘楽郡もほぼ繭供給地であった。

2 生糸流通

次に、生糸の流通に関する数値を検討しよう。県内生産生糸の出荷は、輸出糸として横浜へ向けられるか、国用糸として国内織物産地に向けられるかであった。いずれの場合も、最終出荷地に至る間に県内の郡間を移動することが少なくなかった。「農事調書」による第4表は、県内各地から桐生向けの出荷を対象外としている。移入は新潟県から西群馬郡への5千貫、福島・長野県から山田郡への42千貫などで、前者は高崎町と北毛への窓口である渋川町を、後者は大間々町を拠点とするものであろう。移出は、東群馬・南勢多郡計の31千貫、西群馬郡の24千貫、北甘楽郡の24千貫、碓氷郡の12千貫が主で、合計は100千貫となり、そのうち99千貫＝11千箇が横浜向けというものである。

この第4表の数値も問題が多い。第4表などの数値の吟味を兼ねて、1888年分の横浜生糸売込記事のうち「群馬県生糸」の分を集計して第5表にまとめた¹⁴⁾。「群馬県生糸」とは、売込記事の荷名に「上州」「前橋」などの群馬県地名があるもの、あるいは、荷名に出荷者が書かれ、その荷主が群馬県にいたるものである。群馬県生糸の売込記事の集計は石井寛治氏によって複数年度について行われているが、いずれも3～4カ月分の集計である。第5表は、「群馬県生糸」をさらに地域別に分類したものである。第5表の県合計の売込量は15,023個＝135千貫で、『横浜生糸貿易十二年間概況』（原商店、1894年刊）の掲げる1888年の横浜生糸売込量の群馬県分15,536個にほぼ見合う¹⁵⁾。しかし、第4表の横浜出荷分の県合計11千箇＝99千貫よりずっと大きい。

生糸の県内生産、県内消費、横浜移出（横浜への移出）、他県移出（横浜以外への移出）、県外移入（他県からの移入）の量的関係は次のようになる。

県内生産＋県外移入＝県内消費＋他県移出＋横浜移出

県内生産－横浜移出＋県外移入＝県内消費＋他県移出

右辺は国用糸であり、県内は桐生向けと生絹原料、県外は足利向けなどである。横浜移出量を横浜売込量で置き換えれば、次の関係が種類ごと、および全種類合計について成り立つ。

県内生産－横浜売込＋県外移入＝国用

また郡単位でも同様である。

郡内生産－横浜売込＋郡外移入＝郡内消費＋他郡移出

第4表 群馬県郡別生糸移出入量（1888年）

郡名	県外へ		県外から	
	量	種類・量／仕向地	量	種類・量／仕出地
利根	貫 88	座繰／横浜	貫 0	
吾妻	564	座繰／横浜	0	
北勢多	108	？／横浜	0	
東群馬	31,140	器械2,876／横浜、 座繰28,264／横浜	欠	
南勢多	877	座繰／横浜	0	
西群馬	24,444	器械4,743／横浜、 座繰19,701／横浜	5,139	器械1,791／新潟県、 座繰3,348／新潟県
碓氷	12,071	座繰／横浜	0	
北甘楽	23,901	器械47／横浜、座繰14,069／横浜、 提糸9,785／横浜	0	
南甘楽	198	器械178／横浜、座繰20／武州	欠	
緑野	3,319	？／武蔵	0	
多胡	1,785	座繰／横浜	欠	
佐位	845	器械485／横浜、座繰360／栃木県	1,080	座繰／埼玉県
山田	0		41,991	座繰25,195／福島県、 座繰16,796／長野県
邑楽	621	座繰225／栃木県、 座繰396／埼玉県	905	座繰／茨城県
合 計	99,961		49,115	

資料)「農事調査」。

注) 全県編111～118頁の表を基本にし、118～120頁の2表と郡別編も吟味して作成。

「合計」は井川による集計。「0」は郡別編の移出入表に数値不記載のもの。

「欠」は全県編の移出入の表に数値が不記載で郡別編が不残存。

北勢多郡：郡別編に記載、全県編に不記載。

片岡郡：郡別編に移出入表なし。全県編の表に不記入。

緑野郡：郡別編に記載、全県編に不記載。

那波郡：郡別編不残存、全県編の表に不記入。

新田郡：郡別編では「生糸、(仕向先)山田郡桐生町・大間々町・野州足利町、

座繰1097貫・太糸802貫・屑物901貫(貫未満略)」と記載、全県編では不記載。

邑楽郡：郡別編には上記と数値の異なる移出入表もある。

さて、生産量・移出入量・売込量の関係を生糸種類別に調べるために、「勸業年報」から第6表を作成した。「農事調査」の生糸生産量は、郡別編碓氷郡を例外として、内訳を「器械」と「座繰」としていて、提糸などは「座繰」にまとめているようであり、またこの時期の「県統計書」には生糸生産量の種類別内訳がない。提糸の生産量は「勸業年報」に拠るしかないが、その各年の数値は非常にデコボコで、信頼性に乏しい。ここでは一つの試みとして、各郡ごとに「勸業年報」の生糸生産量合計が第1表のそれに最も近似している年を取り、種類別内訳を知る資料とし

第5表 売込記事による群馬県生糸の地域別個数（1888年）

郡	売込件数	売込量	売込個数	内 訳（荷名と個数）
利 根	9	貫 684	個 76	沼田坐45、沼田20、北利根坐11
吾 妻	18	2,637	293	吾妻提126、吾妻坐97、吾妻製糸51、吾妻19
北 勢 多	4	297	33	上州糸井坐33
東群馬・ 南 勢 多	293	48,029	5,336.5	別掲（第13表）
西 群 馬	83	11,961	1,329	渋川提232、高崎坐169、高崎向井（坐）136、高崎高砂組（坐）124、高崎旭社（器）115、高崎提91、高崎宏原社（坐）80、高崎大成社（坐）72、高崎昇明社坐69、高崎小川坐56、高崎連行社器53、倉賀野坐49、高崎高橋坐22、渋川坐20、高崎改良商社坐18、高崎増尾15、高崎器8
碓 氷	81	17,195	1,910.5	碓氷社（坐）1221、上州上原坐258、安中提253、安中平林器坐84、安中共同社器坐76、安中製糸坐15、安中館林3.5
甘 楽	79	23,760	2,640	下仁田提1126、富岡提788、甘楽社（坐）487、下仁田179、甘楽共良社坐50、富岡坐10
緑 野	15	3,317	368.5	緑野社坐199.5、緑野坐161、藤岡改良組坐8
多 胡	1	90	10	多胡製糸坐10
佐 位	9	855	95	伊勢崎亀静社（坐）61、伊勢崎三友社（坐）28、伊勢崎柴田坐6
新 田	2	324	36	新田製糸社坐36
山 田	11	4,167	463	大間々提257、大間々152、大間々坐54
邑 郡	2	203	22.5	館林坐19、安中館林3.5
郡 不 明	120	21,695	2,410.5	上州坐2039、上州164.5、上州器64、上州上神坐46、上州城山器坐34、上州新井坐31、上州白井（坐）19、上州提13
合 計	727	135,212	15,023.5	

資料）『時事新報』1888年・1889年（復刻版、龍溪書房）。

注）最右欄の荷名の末尾は以下の通り

器；すべて器械糸。坐；すべて座繰糸。提；すべて提糸。

器坐；器械糸も座繰糸もある程度あるもの。

（坐）；造不明や他の造の糸もあるがほとんどが座繰糸のもの。

（器）；造不明や他の造の糸があるがほとんどが器械糸のもの。

末尾にこれらが無いものは、「大間々5個」など、造不明のもの。

た。以下、種類別に流通の様相を見よう。ただし、器械糸については、生産＝横浜売込で、国用はゼロに近いとみて省く。

まず提糸である。第6表（生産）・第5表（売込）・第4表（移出入）の数値を第7表にまとめた。提糸の「売込」量の集計は、第5表のうち荷名に「提」が付く荷と荷主名がない荷の売込量を合計した近似的数値である¹⁶⁾。「県合計」では、県内生産－横浜売込＝18.7千貫で、県外と県

内の消費が62.1千貫以上（第2表）あるなら、県外移入が43.5貫以上ある計算になる。「農事調査」の横浜移出量9.8千貫を採るなら、県外移入は18.0千貫以上である。

第6表 群馬県主要郡の種類別生糸生産量（1888年頃）

郡	器 械	改良坐繰	提 糸	そ の 他	合 計	年
	貫	貫	貫	貫	貫	
吾 妻	292	498	1,437	—	2,227	1888
南 勢 多	820	13,542	11,378	—	25,740	1888
東 群 馬	3,366	28,638	7,297	—	39,301	1889
西 群 馬	1,607	4,935	9,417	—	15,959	1889
碓 氷	2,586	9,484	1,826	62	13,958	1890
北 甘 楽	337	10,314	3,776	—	14,427	1888
緑 野	547	1,209	1,324	—	3,081	1888
多 胡	315	640	894		1,849	1888
佐 位	633	1,245	2,147	—	4,026	1888
那 波	—	1,002	1,826	—	2,828	1889
山 田	—	23	699	—	722	1890
以 上 計	10,504	71,531	42,021	62	124,117	
県 合 計	9,220	103,405	61,086	—	173,711	1887
	13,939	67,790	53,879	62	135,669	1888
	18,008	94,885	49,064		161,957	1889
	9,685	58,373	35,947	4,879	108,884	1890

資料）「勸業年報」明治20～23年版。

注）各郡とも「勸業年報」1887～1890年のうち第1表の生糸生産量に合計が最も近い年を取った。

1890年の内訳は、正確には器械捻造・座繰捻造・提造・折返総・島田造・鉄砲造。

折返造・島田造・鉄砲造を合計して「その他」とした。合計は計算値。

郡別に見て最も注目されるのは、北甘楽郡の「売込」18.7千貫が郡内「生産」3.8千貫を大きく上回ることであり、仮に「農事調査」の横浜移出量9.8千貫を採っても「生産」を上回る。荷名で言うと、「下仁田提」1,126個、「富岡提」788個、両者合計1,914個＝17.2千貫が「横浜売込」のほとんどを占める。他県・他郡からの提糸が「下仁田提」「富岡提」として横浜出荷されたのであろう。「農事調査」には次のようにあり、北甘楽郡産の生糸はすべて輸出用という。

〔北甘楽郡〕…内国需要糸トシテ製造スルモノ絶テナシ、要スルニ内国用ノ者ハ、其糸質等劣スル者需用多キヲ以テ、随テ価格モ低廉ナラザルベカラズ、故ニ其低廉ナルモノヲ製出セシヨリハ、農閑ノ時季之ヲ生絹、若クハ太織等ニ自製、販売セルノ勝レルニ若ザルヲ以テナリ¹⁷⁾

碓氷郡も「安中提」によって「売込」の方が大きい。『群馬県蚕糸業沿革調査書』（以下「沿革調査書」と略記）の次のような記述によれば、安中の提糸は富岡町や前橋町にも出荷されたようである。

第7表 群馬県主要郡の提糸流通（1888年頃）

郡	生産	売込	生産－売込	県外移出	提内容（個）
吾妻	貫 1,437	貫 1,305	貫 132	貫	吾妻提126、吾妻19
東群馬・南勢多	18,675	4,374	14,301		前橋提402、前橋84
西群馬	9,417	2,907	6,510		渋川提232、高崎提91
碓氷	1,826	2,309	－483		安中提253、 安中館林3.5
北甘楽	3,776	18,747	－14,971	9,785	下仁田提1126、富岡提788、 下仁田179
緑野	1,324	0	1,324		
多胡	894	0	894		
佐位	2,147	0	2,147		
那波	1,826	0	1,826		
山田	699	3,681	－2,982		大間々提257、大間々152
郡不明	0	1,598	－1,598		上州164.5、上州提13
以上計	42,021	34,920	7,101	9,785	
1888年県計	53,879	35,195	18,684		提3288、種類不明622.5

資料）第4～6表。

抑碓氷郡磯部地方は古来より坐繰製糸を副業とし自家の産繭を以て提造糸に製し物産として販売し大に名声を博しつゝあり（自家の産繭を製造して尚ほ余力ある者は信州佐久郡の繭を移入して製糸することありしと云ふ）、各製糸せし者は之を安中又は富岡市場に鬻ぎ又は地方に仲買人ありて製品を買収し前橋市場に持ち出し同地に於て桐生町仲買人又は機業家に売渡し重に桐生地方織物の原料に供したり¹⁸⁾

これらが妥当で「売込」以外の出荷も多かったとすれば「生産」の不足はさらに大きくなり、「安中提」にも他県・他郡の提糸が混入していることになる。

山田郡でも「大間々提」「大間々」によって「売込」が「生産」よりずっと大きい、「農事調査」は次のように記す。

〔山田郡〕当郡ノ製糸ハ大概桐生地方機業者ノ需用ニ供シ、外国へ輸送スル能ハズ、是レ糸質ノ良好ナルガ為メナリ／大間々地方ハ〔生糸〕産額多キガ為メ、売買ヲ営ムモノ多ク居住ス、且ツ毎市購入ノ生糸ハ、之レヲ桐生地方ニ販売スル…／当郡ノ蚕糸ハ桐生ノ需用ニ対シ不足ヲ告ゲタレバ輸出ノコトナシ／当郡ノ蚕糸ハ輸出セザルガ故ニ〔内地需用糸ト海外輸出糸トノ相場ノ差異〕に關する〕比較ナシ、然レドモ何分輸出ヨリ利益ナランカ／当地方ノ生糸ハ、総テ桐生機業者ニ鬻グモノナレバ、荷造等堅牢ノ法ヲ要セズ／生糸ハ提造ヲ多シトス¹⁹⁾

郡内で生産される提糸は国用だというのであり、横浜に出荷された「大間々提」もほとんどが他地域産であろう。

これらとは逆に「売込」が「生産」よりずっと小さいのが、東群馬・南勢多郡と西群馬郡である。東群馬・南勢多郡の「生産」19.6千貫に対し「売込」は「前橋提」402個「前橋」81個合計483個＝4.4千貫に過ぎない。また、西群馬郡の「生産」9.4千貫に対し「売込」量は「渋川提」232個「高崎提」91個合計323個＝2.9千貫に過ぎない。西群馬郡について「農事調書」は次のように言う。文中にある「座繰製糸」はこの場合は提糸だろう。揚返前の小粋糸なら「改造」の必要はない。

〔西群馬郡〕本郡生糸ハ概シテ外国向九分ニシテ、内国用ハ僅々一分ニ過ギズ、而シテ内国用ハ玉糸・手繰糸・熨斗糸等ヲ併セ、郡内婦女子ノ内業ニ係ル生絹・生太織ノ原料ニ充ツル目的トシ…／本郡生糸製造専業ノ重モナルハ高崎町・渋川町・倉賀野町トス、其原料ニ於ケル県下産出又ハ埼玉県下等ヨリ買収ス、而シテ製造法ハ座繰製糸トス／本郡生糸ハ普通前橋町・高崎町・安中町・藤岡町・渋川町等ノ市場ニ販売シ、荷主ハ捻糸ニ改造シ横浜ヘ輸送スルヲ常トス²⁰⁾

前橋町・高崎町近辺で生産された提糸は、大間々町中心の東毛に向かい国用糸になるか、西毛の安中・富岡・下仁田へ向かい、そこからそれらの地名を冠する提糸か改良座繰糸として横浜へ出荷されたのであろう。ちなみに「農事調書」の移出入表（第4表）では、提糸移出として北甘楽郡からの9.8千貫しか記されていない。

次に改良座繰糸について概観したい。

第8表は第7表と同様の方法でまとめたものである。東群馬・南勢多郡、西群馬郡、碓氷郡、北甘楽郡および「郡不明」の「売込」量については、売込量（売込記事集計）合計から提糸の売込量（第7表）と器械糸生産量（第6表）を差し引き算出した。これらの郡の大きな出荷者の売込記事の荷名の大半は「坐繰」か「器械」であり「提」はないが、種類名が付していないものがあり、「坐繰」か「器械」の可能性が高いがどちらか判断できない記事が少なくない。そのため、器械糸生産量を器械糸「売込」量と同じとみなし、前述の減算を行ったものを改良座繰糸の「売込」量とした。その他の郡は第4表の荷名のうちの改良座繰糸と思われるものを拾って集計した。

ただし、次の2つの問題があり、「生産－売込」を算出して考察するのを断念した。第8表では「郡不明」の「売込」が20.1千貫と大きく、全体の22%も占める。具体的には「上州坐」2,039個、「上州」164.5個、両者合計2,203.5個＝19.8千貫がその主な内容である。これがどこから出荷されたかによって、第8表の見方は大きく変わる。「農事調査」移出入表による「横浜移出」と「売込」の数値を比較すると、前者が西群馬郡では12.3千貫も大きく、「移入」を除いても9.0千貫大きい。また北甘楽郡でも9.5千貫大きい。この2郡の差の合計は「売込」の「郡不明」20.1貫に近い。したがって、「郡不明」の改良座繰糸の多くが西群馬郡高崎町や北甘楽郡下仁田町・富岡町から横浜出荷された可能性が考えられる。

しかし、前橋町について第9表のような数値があり、これによれば1888年の改良座繰糸の横浜向け出荷は50.6千貫で、第8表の「東群馬・南勢多郡」の「売込」39.5千貫より11.1千貫も大きい。「上州坐」などの「郡不明」は前橋町から出荷されたのかも知れない。

次の問題は、北甘楽郡の甘楽社の横浜売込である。第8表の北甘楽郡で「生産」より「売込」が著しく小さいのは、「甘楽社」の売込量が487個＝4,383貫と小さいためである。これは「沿革

第8表 群馬県主要県の改良座繰糸流通（1888年頃）

郡	生産	売込	横浜移出	他県移出	県外移入
	貫	貫	貫	貫	貫
吾妻	498	1,332	564		
東群馬・南勢多	42,180	39,469	29,141		
西群馬	4,935	7,447	19,701		3,348
碓氷	9,484	12,301	12,071		
北甘楽	10,314	4,676	14,069		
緑野	1,209	3,317	3,319		
多胡	640	90	1,785		
佐位	1,245	855		360	1,080
那波	1,002	0			
山田	23	486			41,991
郡不明	0	20,097			
上記計	71,530	90,070	80,650	300	46,419
1888年県合計	67,790	86,078	81,529	981	47,424

資料）第4～6表。

調査書」の記す1888年の「生糸製出高」15,064貫＝1,674個より著しく小さい。同書によれば、同社の生糸生産量は、1887年16,769貫、1889年13,456貫である²¹⁾。甘楽社の改良座繰糸が「上州坐」などとして売り込まれたのであろうか。非常に重要な点であるが、これ以上検討する材料をいま持たない。

碓氷郡も見ておこう。第8表の碓氷郡の「生産」の数値は「勸業年報」1890年の数値を用いたものである。「売込」12,301貫のうち、「碓氷社」1,221個＝11,989貫である（第5表）。碓氷社側の記録では1888年の生糸製出高1,358個＝12,222貫で売込量とほぼ等しい。第5表の売込集計では、「上州上原坐」258個＝2,322貫は安中町上原清七とみて碓氷郡に入れた²²⁾。碓氷社と上原の合計が第8表の「売込」12,301千貫を越えるのは、前述の減算の操作を行う際に「勸業年報」の器械糸生産量2,586貫という大きな数値を用いたため後者が小さくなったからである。「農事調査」は1888年の同郡の器械糸生産量を700貫としている。

確実なのは、42.0千貫という大量の改良座繰糸が県外から山田郡に移入されたことで、桐生織物業の原料糸となったものであろう。

東毛産の生糸の出荷については、提糸も含む記述であるが、「農事調査」には次のようにある。

〔佐位郡〕郡内中央ニ（伊勢崎）市場アリ、販売上頗ル便ナリ／（製糸は）一二製産者ノ外総テ内地販売者多シ²³⁾

〔新田郡〕本業〔製糸業〕ニ対シテ、一社又ハ組合等ヲ設立ナク、直ニ製糸家季節ニ臨ミテ売買ヲナスニ止リ…／生糸産額僅々ナルヲ以テ売買ヲ営ムモノ又解〔鮮〕ク、…其販路ハ

隣郡桐生町・大間々町、及び野州足利町等へ出荷スルモノ多ク…²⁴⁾

〔邑楽郡〕本郡ハ概ネ内国需用品ヲ製出セリ²⁵⁾

第4表には、佐位・邑楽郡から栃木県への改良座繰糸の県外移出があり、東毛や佐位郡については、桐生・足利向けの生産と見ていいだろう。

「農事統計」の生糸生産量の経年変化は小さいが²⁶⁾、「勸業年報」による改良座繰糸生産量は1887年103千貫から1888年の68千貫へと大きく減少している。「勸業年報」の方が事実近く、1888年生産生糸の横浜売込量としては第7表の「横浜売込」が過大な可能性がある。なぜなら、1888年の生糸売込量は、1887年の年末近くに生産された生糸が1888年になってから売込まれた分を含むからである。

最後に、北毛の生産・流通に関する「農事統計」の記述を確認して、明治中期の県内地域構造の検討を終えたい。

第4表の北毛の荷では、「吾妻提」「吾妻坐」「沼田坐」など、荷名に出荷者名がなく地名のみある生糸の売込量が多い。第8表の吾妻郡の「売込」は「生産」を上回っていて、前に引用した記述にあったように、「吾妻坐」などに他地域産の生糸が混入しているようであるが、「農事調査」は前橋町・渋川町にも流れているという。

〔吾妻郡〕(生糸)産額年ヲ逐フテ増加セシハ、繭ノ儘売却スルヨリハ製糸ノ上売却スル方利益多キガ故、養蚕家ノ製糸ヲナスモノ漸次増加セシニヨル／本郡ハ産額多キガ故ニ、生糸ノ売買ヲ営ムモノ又多ク、其売買者ハ前橋・横浜へ持出シ販売シ、或ハ前橋・渋川等ヨリ商人入込買フモノアルヲ以テ販売ニ便ナリ、然レドモ合同販売ノ途ハ成立チ居ラズ²⁷⁾

利根・北勢多郡とは違って、吾妻郡では改良座繰の吾妻製糸会社が誕生したが、1890年には縮小し、1900年以降に吾妻郡内が碓氷社の地盤に編入されていくという²⁸⁾。第5表の「吾妻提」「吾妻」の売込量は「吾妻坐」「吾妻製糸」の改良座繰糸のそれに匹敵している。

第9表 前橋市場生糸集散数量(1887・1888年)

年	種 類	仕 向 量			
		合 計	横 浜 向 け	桐生新町足利 其 他 向 け	米 国 向 け
1887		貫	貫	貫	貫
	改良座繰糸	43,121	32,407	項なし	10,714
	提 糸	18,262	15,289	2,973	項なし
	合 計	61,383	47,696	2,973	10,714
1888					
	改良座繰糸	51,835	50,602	600	633
	提 糸	28,920	18,828	10,092	項なし
	合 計	80,755	69,430	10,692	633

資料)「勸業年報」明治20年版・21年版。

注) 仕出量の全量が「地廻」。仕向量合計＝仕出量。

3 1870年代の群馬県製糸業

以上「農事調査」と「横浜売込記事」を中心として1888年頃の郡別の蚕糸生産・流通の概要を確認したが、これに遡る2つのデータがある。いずれも既に紹介されているものであるが、第1表などの数値を理解するためには、見逃すことができない。

第10表は「郡村誌」の各町村の「物産」の書上げを集計したもので、1875～77年頃の繭・生糸の生産量の手がかりになるものである²⁹⁾。生糸の県合計は57千貫であり、第1表の133千貫の半分に満たず、史料の性格から過小な数値であることは確実である³⁰⁾。書き上げられた量が生産量でなく商品化されたもののみ量を記している町村もありそうである。以下、便宜上生産量と呼んでおく。県全体としては、繭より生糸の商品化率が高い村が多かったであろう。しかし全県合計

第10表 「郡村誌」の繭・生糸量（明治1877年頃）

郡 名	繭（石表示）	繭（貫・斤表示）	繭（合計）	生 糸
	石	貫	石	貫
利 根	5,002	0	5,002	1,000
吾 妻	4,831	0	4,831	697
北 勢 多	595	1,638	1,026	0
小 計	10,428	1,638	10,859	1,697
南 勢 多	5,425	5,835	6,961	6,845
東 群 馬	1,538	0	1,538	17,821
小 計	6,963	5,835	8,499	24,666
西 群 馬	7,267	10,270	9,970	6,999
片 岡	209	0	209	180
碓 氷	1,330	3,917	2,361	4,166
北 甘 楽	1,660	39,594	12,079	8,781
南 甘 楽	1,027	3,428	1,929	285
緑 野	10,089	9	10,091	2,061
多 胡	1,947	0	1,947	972
小 計	23,529	57,218	38,586	23,444
佐 位	2,223	208	2,278	1,093
那 波	4,206	0	4,206	1,180
小 計	6,429	208	6,484	2,273
新 田	1,645	1,105	1,936	1,258
山 田	1,683	0	1,683	4,098
小 計	3,328	1,105	3,619	5,356
合 計	50,677	66,004	68,046	57,436

史料）「郡村誌」。

注）邑楽郡は史料欠。

繭（合計）＝繭（石表示）＋繭（貫・斤表示）÷3.8。乾繭3.8貫＝1石。

推計方法については稿末補注参照。

では、繭生産量68千石が生糸生産量57千貫を上回っている。この段階では県内生糸生産のための原料繭を県外に頼ることは少なかったと思われる。また第2表と同様の方法で推計した織物原料生糸量（第11表）の生糸生産量に対する割合を1888年と比べると、西群馬郡は1888年より低い、碓氷郡は14%、北甘楽郡は12%でより高く、生絹生産がより盛んだったことが推測できる。

郡ごとの繭量と生糸量の比を、第1表の1888年と比べてみよう。北毛3郡計では繭生産量に対する生糸生産量の割合はどちらも16%であり、吾妻郡もまだ繭供給地の色彩が濃い。同書の記述によれば、利根・北勢多郡の繭はほとんど前橋へ、吾妻郡の繭は前橋に加えて西群馬高崎町・渋川町、碓氷郡安中町へも出荷されていた。中毛では、南勢多郡の繭生産量と生糸生産量がほぼ同じであることが注目される。前橋町に接する同郡ではまだ他地域の繭供給を受けない養蚕農家の兼業的製糸が一般的であったことが推測できる。西毛では、西群馬郡の繭生産量と生糸生産量の比は1888年と大差ないが、碓氷郡では生糸の方が大きく、北甘楽郡では逆に生糸の方が小さい。両郡ともに繭生産量と生糸生産量とに大差がない1888年と異なっている。古い時代ほど碓氷郡の生糸生産の方が盛んだったように思われる。緑野郡では繭生産量に対する生糸生産量の比が1888年の半分である。これは佐位郡・那波郡でも同様である。東毛では山田郡の生糸生産量が繭生産量を上回っているが、1888年では逆転する。

第11表 「郡村誌」の絹織物量（1877年頃）

郡 名	絹	太 織	推計織物原料 生 糸 量
	反	反	貫
吾 妻	132	80	0
南 勢 多	17	0	1
西 群 馬	17,898	17,484	537
片 岡	660	0	40
碓 氷	9,759	5,135	586
北 甘 楽	16,789	1,730	1,007
南 甘 楽	112	30	7
緑 野	4,496	645	135
多 胡	5,328	556	160
佐 位	164	10,282	0
那 波	220	19,100	0
新 田	240	1,580	0
山 田	110,370	0	11,037
合 計	166,185	56,622	13,508

史料）第10表に同じ。

注）利根・北勢多・東群馬は絹・太織ともゼロ。

推計織物原料生糸量；南勢多は反当り0.03匁で計算。

他は第2表と同じ。

さらに1872年頃の主要地の生糸出荷量と出荷先に関するデータがある。第10表の生糸生産量とともに第12表に示した。右側がこのデータで、左側が第10表の再掲である。伊勢崎・境と大間々の出荷のうち5,400貫が「前橋市場江廻ル」とされているので、この分は前橋ほか4町の出荷量合計37,350貫と重複しているようである。これを差引いた全体で59,400貫の出荷量のうち、桐生・足利絹織物業向けの国用糸が14,400貫、横浜向けが45,000貫である。国用糸の30%が佐位・山田郡の伊勢崎・境と大間々からの出荷だが、残りは前橋などからの出荷である。前者から前橋に回った生糸は横浜向けになったと見るのが自然だろう。だとすれば、前節でみた「大間々提」も前橋から出荷されたのかも知れない。この出荷量合計は第10表の生糸生産量合計に近いので、地域ごとに比べる意味がある。北毛・中毛が半分を占めること、北甘楽郡の町の出荷量と同郡の生産量がそれぞれ碓氷郡を大きく上回ること、などが指摘できる。

第12表 「上野国全国生糸凡見積」と「郡村誌」の生糸量（1870年代）

郡	生糸量	同小計	集荷地（郡） 〔／は郡の別を示す〕	集荷量	出 荷 量		
					外国輸出	桐生・足利 絹織物場行き	前橋市江廻ル
利 根	貫 1,000	貫 26,363	沼田（利根）／吾妻（吾妻） ／前橋（東群馬・南勢多） ／渋川・白井（西群馬）	貫 37,350	貫 27,000	貫 10,350	貫 0
吾 妻	697						
北勢多	0						
南勢多	6,845						
東群馬	17,821						
西群馬	6,999	7,179	高崎（西群馬）	5,400	5,400	0	0
片 岡	180						
碓 氷	4,166	4,166	安中（碓氷）	1,800	1,800	0	0
北甘楽	8,781	8,781	下仁田（北甘楽）	3,150	3,150	0	0
			富岡・小幡・七日市（北甘楽）	5,400	5,400	0	0
緑 野	2,061	3,318	鬼石・藤岡（緑野）／吉井（多胡）	2,250	2,250	0	0
多 胡	972						
南甘楽	285						
佐 位	1,093	2,273	伊勢崎・境（佐位）	2,250	0	1,350	900
那 波	1,180						
山 田	4,098	5,356	大間々（山田）	7,200	0	2,700	4,500
新 田	1,258						
合 計	57,436	57,436	合 計	64,800	45,000	14,400	5,400

資料）左側：第10表、右側：『前橋市史』第5巻（前橋市、1984）の第219表（1494頁）。

注）第219表の「～余箇」を貫に換算。

左側の「郡村誌」の生糸量は、各郡ごとに集計して小数点以下切捨て表示。

補注

(1) 「農事調書」の郡・町区域

「農事調書」は全県編・郡別編・前橋町分のいずれも稿本で1890年に編纂され、「明治二十一年調」などの付記が随所にあり、「製糸収支表」など例外はあるが、基本的な調査数字は1888年を対象としたと推察される。米作付反別など重要な農産物関係については1884～1888年の、蚕糸業関係の統計については1885～1889年の5カ年の統計が掲載されている。1889年の新・前橋町の成立に伴い、東群馬・南勢多郡の領域が変わっているが、この両郡に関する同書の記述・数値は変更前後のどちらの領域に関するものかという問題がある。本稿では以下の理由で、「農事調書」全県編・郡別編は両郡につき新・前橋町に変更後の領域を、同書前橋町分は新・前橋町の領域を採用していると判断した。

①「県統計書」の東群馬郡の田畑反別合計は1888年1,519町、1889年1,719町で200町増加、これは合併された旧南勢多郡6村（才川・清王寺・一毛・萩・岩神・国領）の田117町・畑92町・計208町（「農事調書」前橋町分記載データ）にほぼ等しい。これに対し「農事調書」では1888年東群馬郡田1,035町・畑692町・計1,727町で「県統計書」の1889年の数値に近い。いっぽう南勢多郡の田畑反別合計は、「県統計書」では1888年10,995町、1889年10,804町で191町減少。「農事調書」では1888年田4,178町・畑6835町・合計11,013町で、「県統計書」1888年の数値に近いが、この数年の田畑反別全体の減少傾向がある。②東群馬郡の農家戸数は「県統計書」1888年1,285戸だが「農事調書」は1888年3,305戸で2,020戸多（1890年10月出版の「勸業年報」明治21年版では3,305戸、なお1889～1891年については「県統計書」「勸業年報」とも農家戸数不記載）。南勢多郡では「県統計書」1888年12,246戸、「農事調書」11,364戸で882戸少。1889年4月新・前橋町成立時に合併された旧南勢多郡6村の戸数合計は728戸（『前橋市史』第4巻334頁、前橋市1988）。③1884～1888年の米作付反別（粳米・糯米）は、東群馬郡につき「県統計書」すべて933町（異常値と思われる1887年を除く）に対し「農事調書」1,035～1,052町は約100町大。同じく南勢多郡につき「県統計書」4,105～4,185町に対し「農事調書」3,941～3,994町（異常値と思われる1888年を除く）は約200町小

(2) 絹織物・絹綿交織物の原料生糸量の推計

1888年の郡別の絹織物生産量は「勸業年報」明治21年版の「織物産額」（1064～1069頁）による。1反当りの原料生糸量については、①「農事調書」全県編103頁の「廿一年生絹・生太織価格及原料調」（「生絹糸好」反当り生糸27.5匁、「同小節」32.5匁、「太織」屑糸75匁）および194頁の絹織物付加価値額計算に、②桐生の絹織物の1反100匁は山脇悌三郎『絹と木綿の江戸時代』（吉川弘文館、2006）69～73頁による。

(3) 横浜生糸売込記事の集計

『時事新報』（縮冊版、龍溪書房）明治21・22年版の「商況物価」欄にある「横浜生糸売込」記事を集計。記事はふつう2日前の横浜売込取引を一件ずつ売込商名・外国商館名・荷名・売込個数の順に記す。ただし、①前の記述を繰り返す際に多用されている「同」の解釈が困難である、②誤字・欠字がある、③字が小さく不鮮明な印刷がある、などの理由で読み取れない箇所がある。「群馬県分」とは、荷名に「上州」「前橋」などの群馬県地名を記しているもの、あるいは、荷名に出荷者が書かれ、その荷主が群馬県にいるものである。もっとも、「渋川提」の渋川が生産地

なのか出荷地なのか集荷地なのか不明である。なお、各記事は末尾にその日に売込まれた生糸の合計を記載しているが、それを集計すると1888年合計で107,665個＝968千貫。内訳は1月5,185個、2月13,881.5個、3月6,891.5個、4月5,918.5個、5月5,774.5個、6月3,881.5個、7月4,448個、8月3,766.5個、9月9,096.5個、10月13,980.5個、11月10,987.5個、12月23,853.5個。

（4）「郡村誌」の繭単位

「郡村誌」の各町村記述にある繭量の単位については、石で示されている町村が最多で、次に貫、ごく少数が斤である。このうち重量表示の貫・斤で表示されているのは乾繭と推測できる。

①利根・吾妻・多胡郡はすべて石表示、緑野郡は1村のみ貫表示だが、次の町村に貫を石に換算した修正がある。利根郡の戸鹿野新田・下久野・川場湯原・横塚・柿平・小松・穴原・大原新町・老神・高戸谷・追貝・平川・幡谷・越本・岩本の15町村、吾妻郡の大柏木の1村、緑野郡の藤岡町・小林・根小屋・阿久津・中嶋・立石新田・金井・西平井・東平井・鮎川・白石・篠塚・本動堂・三木・中大塚・下大塚・矢場・三本木・高山・浄法寺の20町村、多胡郡の吉井町・川内・矢田・東谷・大沢・小棚・片山・本郷・池・中嶋・岩井・黒熊・小串・深沢の14町村、那波郡の下福島のみ貫表示。これらは「郡村誌」が繭につき石単位を原則とした修正と思われる。これらのほとんどは繭3.6～4.0貫を繭1石に換算する修正で、もともと乾繭を貫表示したものと推測できる。貫表示が多く残っている郡でも同様の乾繭の貫表示を石表示に換算した修正がある。すなわち、西群馬郡の綿貫・谷中・東中里・栗先・岩鼻町・宇貫・八幡原の7町村、碓氷郡の中宿村。また南勢多郡の横室・山口村に出来上がり生糸量から乾繭の貫表示と判断できる記述がある。

②「農事調査」郡別編の「繭売買ノ方法」の項に、生繭は柝目で（容積で）、乾繭は貫目だと記述している郡は、南勢多・北甘楽・吾妻・佐位郡。なお、碓氷・北甘楽郡は自家産繭の製糸が多く繭売買は少なく、乾繭の繭売買が多いとしている。

注

- 1) 石井寛治「座繰製糸業の発展過程—日本産業革命の一断面—」『社会経済史学』第28巻第6号。『前橋市史』第5巻（前橋市、1984）。『群馬県史』通史編8（群馬県、1989）。
- 2) 矢木明夫『日本製糸業の成立』（御茶の水書房、1960）。
- 3) 『群馬県史』資料編18（群馬県、1978）。
- 4) 『群馬県蚕糸業現況調査書』（群馬県内務部、1904、復刻版、『明治前期産業発達史資料』別冊（49）Ⅰ）。
- 5) 『群馬県史』資料編18（群馬県、1978）。
- 6) 以上、『群馬県史』『前橋市史』などに拠る。
- 7) 本稿では、屑繭類を含む「繭類」と区別して、ふつうの生糸の原料になる繭（場合によっては「上繭」「本繭」と表現されている繭）を「繭」と表記する。
- 8) 賀川隆行『三井経営史の研究』（吉川弘文館、1985）。
- 9) 『群馬県史』資料編9（群馬県、1977）史料283の241頁。
- 10) この移入量219千石の内訳は、埼玉県106千石、長野県44千石、ほか栃木・福島・神奈川である。埼玉県の1888年の繭・生糸生産量は各58.8千石・生糸33.4千石（『埼玉県統計書』）、1890年の長野県の繭移出量は11.5千石で仕向先は群馬・山梨・神奈川県という（『長野県勧業年報』所収「長野県物産輸出入表」）。

- 11) 「農事調査書」705頁。
- 12) 「農事調査書」743頁。
- 13) 『上野国郡村誌』1～18（群馬県文化事業振興会、1977～1987・1991）。
- 14) 「群馬県生糸」の意味など、集計の具体的方法については稿末補説に記す。
- 15) 『横浜市史』資料編七（横浜市、1970年）、9～13頁。なお各横浜売込記事にはその売込日の売込量の合が記されており、それを合計して全国計売込量を算出すると107,665千箇。いっぽう同書記載の生糸横浜市場入荷量の全国合計は78,047個である。
- 16) 改良座繰糸や器械糸が圧倒的な出荷者の荷にも「提」が付してある荷や、種類名のない荷が少量あるが、これらは無視したので若干過小である。
- 17) 「農事調査書」567頁。
- 18) 『群馬県蚕糸業沿革調査書』（『明治前期産業発達史資料』別冊50(2)、明治文献資料刊行会、1969）146～147頁。「農事調査書」郡別編碓氷郡分は例外的に提糸と思われる「改良座繰」以外の「座繰」の生産量を記しているが、1888年のそれは器械糸700貫、改良座繰糸10,340貫に対し450貫に過ぎない。また「農事調査書」は次のように記す。「…碓氷社組合廿四組各地ニアリテ、各組製出ノ生糸ハ碓氷社ニ取纏メ、共同販売トシテ横浜ニ搬出売却ス、…其他国用提糸ノ如キハ僅少ナリト雖モ、安中市上〔場〕ニ持出シ、仲買人ニ売却ス」（「農事調査書」606頁）
- 19) 「農事調査書」853～855頁。
- 20) 「農事調査書」454頁。片岡郡については「外国向ノ外、内国用ハ則郡内婦女子ノ兼業ニ係ル生絹ノ原料ニ使用スル…／本郡生糸ハ重モニ各自産出ノ繭ヲ製スルニ止リ…殊更他産ノ繭ヲ取得シテ、盛大ノ業ヲ営ムガ如キ製糸家ナシ／本郡生糸ハ西群馬郡高崎町市場ニ販売スルヲ常トシ、直輸又ハ横浜販売或ヒハ合同販売等ヲ試ムル当業家ナク…」同書501～502頁。
- 21) 「沿革調査書」188～190頁。
- 22) 上原清七が石井稿『群馬県史』表50（196頁）に見える。
- 23) 「農事調査書」775頁。
- 24) 「農事調査書」799、814頁。
- 25) 「農事調査書」899頁。
- 26) 「農事調査書」の（非器械糸全部を含む）「座繰」生産量の県合計は、1885年118千貫、1886年125千貫、1887年125千貫、1888年125千貫、1889年126千貫である。
- 27) 「農事調査書」652頁。
- 28) 石井稿『群馬県史』通史編8（群馬県、1989）231～233頁。
- 29) 第10表・第11表については『群馬県史』通史編5（群馬県、1991）239頁の集計があるが、井川が再集計して作成した。以下のような若干の違いがある。〔勢多〕南勢多郡箱田村絹17反見落としか、〔群馬〕西群馬郡広馬場・柏木沢村分800反と同郡南下・北下村分250反を太織でなく絹に分類、〔緑野〕県史表では絹5,394反・太織1,018反で不一致理由不明、〔碓氷〕古屋・高別当・鷺宮村分の絹425反を追加、〔吾妻〕中條町の「縮緬26疋、絹太織80疋」の後者を「絹40疋」「太織40疋」と解釈、〔那波〕県史表の絹200反は集計ミスか、〔山田郡〕交織分を含めなかった。なお「郡村誌」は邑楽郡を欠く。
- 30) 西群馬郡各町村は「出来高」と付して物産の量を記しているものが多く、「町村誌」は生産量を原則としたようである。しかし、町村によっては商品化されたものの量のみを書き上げている場合があり得るし、そもそも生産があるのに書き上げていない町村もあるようである。